The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	護城山碑文(1342)欠落部の発見 : 所収避諱文字と虞韻所属例外字音
Author(s)	清水, 政明
Citation	大阪大学世界言語研究センター論集. 2010, 2, p. 1-17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10660
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

護城山碑文（1342）欠落部の発見
―所収避諱文字と虞韻所属例外字音―

清　水　政　明

SHIMIZU Masaaki

Abstract:

Discovery of the Lost Portion of *Ho Thanh Mountain* Inscription (1342) ：Taboo Characters and the Irregular Sino-Vietnamese Readings in *Yu* Rhyme Group

In our field research dated in March, 2006, we discovered the lost portion (lines 1-12, upper right) of *Hộ Thành Mountain* inscription (1342) which Henri Maspero regarded as the oldest evidence of *Chữ Nôm* material in his monograph on Vietnamese historical phonology [1912]. In this paper, we introduce the reconstructed contents of the first 12 lines of the inscription and analyze the readings of taboo characters contained therein to ensure the regular system of Sino-Vietnamese rhymes corresponding to Middle Chinese ones. One of the taboo characters found there is 𢆶 as part of the person name 陶 个 𢆶 in which 陶 /ɗaw^{2}/^{1} notes a family name and 个 𢆶 /ka^{5} cə̆w^{1}/ a given name. This taboo character holds a homophonic reading to 珠 /cə̆w^{1}/ which is noted as a taboo character in 1298 in Vietnamese annals *Đại Việt Sử Ký Toàn Thư* 大越史記全書. The Sino-Vietnamese reading of 株 and 珠 is /cə̆w^{1}/ which is irregular in the Sino-Vietnamese rhymes corresponding to Middle Chinese *Yú* 虞 rhyme group (/-u/, and /-o/ for *zhuang* 莊 initials) [Mineya 1972, Shimizu 1999]. We prove that the irregular reading was caused by the taboo reading habit under the *Trần* 陳 dynasty and that those taboo readings violated the Sino-Vietnamese rhymes system. One of the predominant rules of taboo-sound derivation is the insertion or substitution of central vowel /ə/ to any rhymes, such as: 利 /*li^{6}/ > /lə̆j^{6}/, 時 /t^{h}ɨ^{2}/ > /t^{h}ə̆j^{2}/, 基 /*ki^{1}/ > /kə^{1}/, etc. The taboo reading /cə̆w^{1}/ is also regarded as an example of /ə/ insertion, because the phonemic sequence /*-əw/ is not allowed in modern Vietnamese phonotactics, therefore the vowel was substituted by the auditory-closest vowel /ə̆/. We also try to extract other rules of taboo-sound derivation such as the alternation of monophthongs and diphthongs through the analysis of colloquial materials, such as the oral literature collected in Southern Vietnam, and conclude that the derivation rules of Vietnamese taboo-sound are basically different from those of Chinese which are based on the initial alternation [Hirayama 1992].

Keywords：*Chu Nom* characters, Sino-Vietnamese readings, Taboo characters, *Ho Thanh Mountain* inscription

キーワード：字喃　ベトナム漢字音　避諱文字　護城山碑文

1．はじめに

ベトナムの民族文字字喃（チューノム）の初期形態を示す重要な資料として Maspero［1912］が紹介し、その後日本のベトナム研究界で「護城山碑文」として知られる漢字･字喃碑文について、清水・Lê・桃木［1998］は内容の紹介と共に、所収字喃の音韻的特徴の一端に関する分析を試みた。その後、当該碑文と同時期に建立された寄進碑文群全８基の中から「施済病田碑」を取り上げ、護城山碑文の分析結果と合わせて 14 世紀ベトナム語における双音節構造の痕跡について指摘した［Shimizu, Lê, Momoki 2006］。護城山碑文は言語学的意義のみならず歴史学的にも極めて重要な意義を有するにもかかわらず冒頭十数行分が欠落しており、発見以来その全貌を知ることができなかった。ところが、2006 年 3 月の調査時に、幸運にも護城山碑文の欠落部分（右上 1 ～ 12 行）を Ninh Bình 省 Non Nước 山（護城山）で発見することができ、当該碑文のほぼ全文が明らかとなった。ここにその欠落部を紹介すると同時に、ベトナム漢字音の体系を考える上で有用と思われる新たに見出された箇所について、その初歩的分析を試みる[2]。結果として、ベトナム漢字音における韻母「虞」韻の対応形式の中で例外的字音と考えられる字音の成立過程を説明し、虞韻の一般的対応形式を確定することが可能となった。

「護城山」とは阮朝紹治帝期に用いられた呼称であり、現在 Non Nước 山と呼ばれる小丘であるが[3]、14 世紀陳朝期には「浴翠山」と呼ばれ、その風光明媚な地理的条件から多く詩人の遊ぶところとなった。例えば､張漢超（? - 1354）の「浴翠山霊済塔記」などは『李陳詩文』に収録されると同時に［Nguyễn 1988: 750-5］、現在でも Non Nước 山腹の磨崖碑文にその内容を窺い知ることができる。我々が問題とする護城山碑文は、当初磨崖碑文として山の壁面に刻されていたものが、碑面の砲弾跡から恐らく抗払戦争期の戦火の中で崩れ落ちたものと思われ、現在は山の麓に碑文面を表に曝した状態で放置されている。その内容は寺院への寄進に関する情報を記した寄進碑文であるが、この度の欠落部発見によりその寺院の名称が「天龍寺」であることがわかった。

欠落部は現在護城山碑文本体の傍らに放置されているが、元々 2003 年にハノイで開催されたスポーツイベント SEAGAME2003 を機に麓の道路を舗装していた際に発見された

1　本稿における声調素の表記は、1: ngang, 2: huyền, 3: hỏi, 4: ngã, 5: sắc, 6: nặng ,7: sắc tắc, 8: nặng tắc に従う。

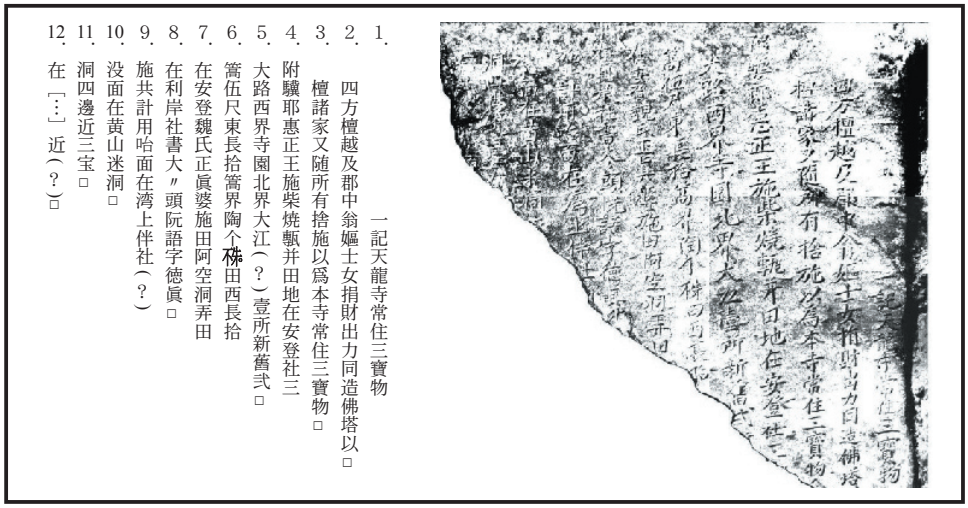
2　本稿の内容は、The 40th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics (Harbin, China, Sept. 26-29, 2007) で発表した内容 ”Discovery of the Lost Portion of Hộ Thành Sơn 護城山 Inscription (1342) and the Irregular Readings of Taboo Characters in Sino-Vietnamese Phonology”［Shimizu, Momoki, Lê 2007］を大幅に加筆･修正したものである。発表時に貴重な意見を頂いた先生方に深く謝意を表する次第である。

とのことである。その正確な時期は不明であるが、登山切符販売員によると、2002 年 10 月頃であろうとのことであった。碑文面は恐らく地面に接触する形でうつ伏せになって放置されていたものと思われ、苔を生してはいるものの文字は鮮明で、磨滅がほとんど見られない極めて良好な状態である。

２．欠落部の内容

まず、新たに発見された欠落部分の内容を以下に紹介する。上述の通り、当該部分は碑の右上部に当たり、冒頭 12 行分の内容が含まれている。そこで、従来から知られる護城山碑文のうち該当部に後続すると考えられる部分と繋ぎ合せ復元した冒頭 12 行の全文並びにその試訳を以下に示す[4]。戦火の中で山腹から崩れる過程で、欠落部が分裂したものと思われ、欠落部と本体部との接合部にも欠字がいくつか見受けられる。

一見して明らかなように、本碑文は漢文を基本としながら人名、地名、数詞、度量衡単位等にはベトナム語が使用されている。それらを以て字喃の初期形態と見なすことが可能であることから Maspero［1912］は現存する最古の字喃資料と見なした訳である。



（図１）護城山碑文欠落部

【原文】

1. 一記天龍寺常住三寶物

2. 四方檀越、及郡中翁嫗士女、捐財出力、同造佛塔、以[…]【紹豊二年壬午畢工。越明年春大會慶讃。一時聞者咸来瞻禮。廼三月[*1]望封[…]】

3 詳細は清水・Lê・桃木［1998］参照。
4 第 13 行以降については、清水・Lê・桃木［1998］参照。今回の欠落部発見により、碑文全体の内容に関しても再考する必要が出てきた。本稿はあくまで所収避諱文字に関する専論であり、碑文全体の内容に関する包括的な再考と詳細な分析に関しては、稿を改めて行うこととする。

3. 檀諸家、又随所有捨施以爲本寺常住三寶物［…］【刻于石永貽厥後。】
4. 附驥耶惠正王、施柴焼甎并田地、在安登社三　【所、内壹所近本寺。除舊常住　地自涇口至寺園門路、新施拾伍面。東界 …】
5. 大路、西界寺園、北界大江 (?)、壹所新舊弐［…］【園、東闊波 *2 拾陸篙、界松路、西闊波拾篙、界小路、丙 *3 長漆拾篙、界小路、北長漆拾篙、界大路。壹 …】
6. 篙伍尺、東長拾篙、界陶个殊田、西長拾［…］【界杜用田、丙闊肆篙伍尺、界杜鬼戦田、北闊肆篙五尺、界多馬 *4。其時、在安登、奴管社陶鈍、知社范鯨等 …】
7. 在安登、魏氏正眞婆、施田阿空洞弄田［…］【高、有上下層。東長二十二高十尺、界范恭、西長二十高五尺、界劉同、丙活二高十三尺、界大路、北活二高一尺、界陶 …】
8. 在利岸社、書大冰頭阮語、字徳眞［…］【洎姉都 *5 陳六、字真修婆、施在寨雷洞田一所、東長一面九高、近小路、長一面九高、近寧个染、丙活一面四高、近小路、北活八高、近主】
9. 施、共計用咍 *6 面、在湾上伴社 (?)、［…］【男勇首阮波来、妻鄭氏 … 田在抛洞没 *7 面、東近界、西近施主、丙近阮氏挑、北近阮分、在黎舎社、養姆阮念、施田】
10. 没面、在黄山迷洞、［…］【隊、東西近賣主、丙近黄勤路、北近三寶。〈□ 其田黎舎洞、今賣換施於此。〉在獲郷　蔡氏、字崇徳居士、洎莊氏、字慈忍比丘尼、施銭二百貫、買田二面在種岡】
11. 洞、四邊近三宝［…］【又論冊内戸張玉凛、施田在種岡　盎檜洞間居人民、拾面、以回向故偶昭勲王子陳翁猛。僧徳増、施没伯貫。在黄江口市〈字保×婆。〉施波拾貫、買没面波高】
12. 在［…］近 (?)［…］【… 隊、東近三宝。僧徳雲、一伯貫。在阿砧市［…］張氏謙、一伯貫。蒙冊　慈圓婆、一伯貫。埋橋社徳圓翁・妙善婆、伍什貫。勝福翁、什貫。】

…

【注】

（？）：直前の一字が不鮮明　　〈　〉：割注部分

□　：一字欠字（紹は推定文字）　　×　：一字判読不能

［　］：欠字部分

【　】：欠落部後続部分（清水・Lê・桃木［1998］参照）

＿＿：固有名詞

*1　月　：「月」の避諱字体。

*2　波　：ベトナム語 ba「三」を表す字喃。

*3　丙　：「南」の避諱字体。

*4　多馬：ベトナム語 tha ma「墓」を表す字喃。

*5　姉都：ベトナム語 chị cả「長女」を表すベトナム式漢語と考えられる。

*6　咍　：ベトナム語 hai「二」を表す字喃。

*7　没　：ベトナム語 một「一」を表す字喃。

（図２）

【試訳】

ここに天龍寺の常住三宝物について記す。

四方の檀家、および郡中の老若男女が互いに財と労力を出し合って仏塔を建造し、紹豊 2 年壬午の年（1342 年）に落成した。翌年の春、祝いの会を催し、聞きつけた者が一同に集まって会を賑わした。そして 3 月になって［･･･諸檀家･･･］。また、全ての寄進物を本寺常住三宝物とし、石に刻んで後世に残すこととした。

附驥耶恵正王は柴を焼いた瓦と安登社の田地を三箇所寄進した。内、一箇所は本寺に近く、従前からの常住地つまり運河の河口から寺園の門に至る道を除いて、新たに 15 面を寄進した。東は大路、西は寺園、北は大江に堺を接している。別の一箇所は新旧二（層）あり［･･･園･･･］、東は 36 篙、松の道と堺を接し、西は 30 篙、小路と堺を接し、南は 70 篙、小路と堺を接し、北は 70 篙、大路と堺を接している。残る一箇所は、［・・・］篙 5 尺、東は 10 篙、陶个株の田と堺を接し、西は 10［・・・］、杜用の田と堺を接し、南は 4 篙 5 尺、杜鬼戦の田と堺を接し、北は 4 篙 5 尺、墓地と堺を接している。

同じ時、安登の奴管社陶鈍、知社范鯨等［・・・］、安登の魏氏正真は、阿空洞弄田の田を［・・・］篙寄進し、上下の層があった。東は 22 篙 10 尺、范恭の地と堺を接し、西は 20 篙 5 尺、劉同の地と堺を接し、南は 2 篙 13 尺、大路と堺を接し、北は 2 篙 1 尺、陶［・・・］の地と堺を接していた。

利岸社の書大冰頭阮語、字は徳真［・・・］並びに長女陳六、字は真修は、塞雷洞の田を一箇所寄進した。東は 1 面 9 篙、小路に近く、（西）は 1 面 9 篙、寧个染の地に近く、南は 1 面 4 篙、小路に近く、北は 8 篙、施主の地に近い。合計 2 面を用いている。

湾上伴社の［・・・］男勇首阮波来、妻の鄭氏［・・・］は抛洞の田を 1 面寄進した。東は境界、西は施主の地、南は阮氏桃の地、北は阮分の地に近い。

黎舎社の養母阮念は、黄山迷洞［・・・］隊の田を 1 面寄進し、東西は売主の地、南は黄勤路の地、北は三宝に近い。〈その田は黎舎洞にあり、今売り換えてここに寄進するものである。〉

獲郷の蔡氏、字は崇徳居士、並びに荘氏、字は慈忍比丘尼は、銭 200 貫を寄進し、田を 2 面種岡洞に買った。四方とも三宝に近い。

［・・・］また、論冊の内戸張玉凛は、種岡社盎檜洞の人民が点在する田を 10 面寄進して、昭勲王の子陳翁猛を回向した。

僧徳増は、100 貫を寄進した。黄江口市の字保？婆は、30 貫を寄進し、 1 面 3 篙［･･･］の田を［・・・］隊に買った。東は三宝に近い。

僧徳雲は、100 貫を寄進した。阿砧市の［・・・］張氏謙は、100 貫を寄進した。蒙冊

の慈円婆は、100 貫を寄進した。埋橋社の徳円翁・妙善婆は、50 貫を寄進した。勝福翁は、10 貫を寄進した。...

3．所収避諱文字

護城山碑文冒頭部に建立年として陳朝の元号「紹豊」（1341 ～ 1357）と目される 2 字が見えた。「見えた」というのは、筆者らが 1989 年に現物を確認した際には既に当該 2 字が故意に削り取られた跡が見られ、Lê［1989］の基となった調査の際にはまだかすかに確認できたからだ。いずれにせよ本碑文が陳朝期のものであることは、碑文中に見える避諱文字の使用状況からも証明することが可能である。避諱とは、皇帝（及び親族）の諱として使用される文字を書記、発音する際に避ける風を言うが、従来知られる碑文の主要部に見える避諱文字として、上述の注 *3 を始め碑文全体に散見される「丙」（「南」の避諱字体）及び上述注 *1 を始め第 2, 24 行[5] に見える「冂」（「月」の避諱字体）が挙げられる。これら 2 字については、ベトナムの正史『大越史記全書』（以下、『全書』）本紀巻之六の以下の記事により、少なくとも興隆 7（1299）年から光泰 8（1395）年の間にかけて、避諱の対象とされていた事実が窺える。

己亥七年（1299 年）夏、四月十二日、

詔禁欽明大王、善道國母諱欽明諱柳、善道諱月善、道柳夫人。臨文不得用、若魏、濕、南[6]、乾、蘇、峻、英、顙等字、臨文減畫、陳諱外親、自此始。

（詔を下して、欽明大王、善道国母の諱を禁じた。［割注：欽明大王の諱は柳、善道国母の諱は月善、道は柳の夫人である。］文書の中で使用することはできない。魏、濕、南、乾、蘇、峻、英、顙等の字は、文書の中では画数を減らして記す。陳朝が外戚の諱を避け始めたのは、ここからである。）

乙亥八年（1395 年）春、二月二十日、

却月字南字諱、許用依舊。

（月、南の字の諱を取止め、以前のように使用することを許す。）

次いで、本稿で主な考察対象とする、欠落部に見える避諱文字「𢀜」について見る。この字体は陳朝期の避諱文字に典型的な字体である。陳朝期の書記言語における避諱の方法は、主に文字そのものを改変する方法（改字）、文字の一画を省略する方法（欠筆）、そして文字の末筆を圏点（○）に置き換える方法の 3 種があるが、当該避諱字体は明らかに第三の方法によるものと思われる（図 2 参照）。碑文全体を見渡すと、第 15 行に見える「干̥」

5　清水・Lê・桃木［1998］の行数は、欠落部の第 1 行を欠いているので、今後第 1 行「一記天龍寺常住三寶物」を含めた行数を示すこととする。よってここに言う第 24 行は、左記論考中の第 23 行を指す。

6 「南」が誰の諱か現時点では不明［Ngô 1997: 52］。

とこの「𣗳」の２字が該当する。前者は現時点でいかなる文字の避諱字体か判然としないが、後者に関しては、同じく『全書』本紀巻之六の以下の記事が参考になる。

戊戌六年（1298 年）春、
　頒魏、珠二字諱。
（魏、珠二字の諱を頒布する。）

「珠」に関しても、実際のところ誰の諱か判然としないが、この記事と前掲の己亥七年（1299 年）夏の記事から、後者において「魏」と一緒に頒布され、前者から「魏」が陳英宗（1293 ～ 1314）の外戚の諱であると考えられることから、「珠」もやはり陳英宗の外戚に当たる人物の諱ではないかと推測される。一方、欠落部に見える「𣗳」はその避諱字体から元来の字体を推定すること自体若干の困難を伴うが、偏旁「不」を「木」の異体と考えると当該字は「株」と推定される。「株」が避諱字体の様相を呈するのは、中国の「嫌名」の風と同様［陳 1962］、ベトナムにおいても、避諱文字のみならず、同音の諸字も避ける対象となったことによると考えられる。例えば、陳朝期の碑文で「乗」字の末筆が圏点に置き換えられる例[7] は、陳太祖の諱「承」と同音（いずれも現代ベトナム漢字音は thừa /thɯə^{2}/）によるものと考えられる。したがって、「珠」と同音の「株」（いずれも現代漢字音は châu /cəw^{1}/）も避ける対象とされ、避諱文字の様相を呈するに至ったものと考えられる。

上記 Ngô［1997］は、あらゆる史料に見える避諱文字を網羅的に収集し、巻末にその一覧表を附した、ベトナムの避諱に関する基礎的且つ重要な文献であるが、「珠」あるいは同音諸字の実際の回避例については記していない。おそらく本碑文における例が最初の発見例ということになるであろう。

４．ベトナム漢字音に見る避諱改音

続いて、当該避諱文字の漢字音について考察する。まず元来の避諱文字「珠」の所属中古音は章母、虞韻、平声、合口、三等韻、「株」は知母、虞韻、平声、合口、三等韻であり声母を異にするが、現代ベトナム漢字音は共に châu /cəw^{1}/ である。中古音の所属から考えると、後者は本来 *trâu/ʈəw^{1}/ という字音が期待されるところであるが、声符の共通性から前者の字音からの類推により同様の字音を持つに至ったものと推測される。ここで注目したいことは、韻母 -âu/əw/ が、所属する虞韻の規則的対応音から外れるという事実である。以下、本字音が避諱改音により人為的に不規則な字音を持つに至った可能性を指摘するが、まずベトナムにおける避諱改音の一般的な傾向について考察を試みる。残念ながら上述 Ngô Đức Thọ の著作には避諱改音に関する考察が希薄であり、散発的な例に対

7　例えば、Thanh Hoá 省 Nga Sơn 県にある『崇嚴寺碑』（1372 年建立）第５行「則乗興游方」の中に避諱字体「乘」が見える［Phan, et al. 2002:555］。

する改音の可能性を指摘するに止まっており、一般的な規則を導くには至っていない。恐らく史料の中で避諱改音に関して具体的に記した記事自体が散発的であり、尚且つ比較的網羅的に記載されているのが阮朝期以降であることから、それを基に規則を導きだすことが難しいからだと推測される。以下にそのいくつかを紹介し、史料に記された改音の事例と、実際に現代漢字音に伝承される避諱改音の事例を比較してみたいと思う。

例えば、阮朝期に編纂された正史『大南寔録』の正編第二紀巻百七十五明命十七年三月の条に以下のような記述が見られる。

> 命禮部攷弛禁九字于中外。皞字皜字均讀作昊、鎬字鄗字杲字均讀作皓、繳字讀作灼、稿字讀作教、縞字讀作誥、担字讀作亶、凡臨讀仍讀作正音、臨文竝聽行用。
>
> （礼部に命じて、9 文字の使用の禁止を内外において緩和する旨を頒布させた。［割注：皞・皜の字はいずれも昊と読み、鎬・鄗・杲の字はいずれも皓と読み、繳の字は灼と読み、稿の字は教と読み、縞の字は誥と読み、担の字は亶と読むことになっていたが、全て読み上げる際には、常に正規の字音で読み、文中で書く場合もその使用を許可した。］）

これは、阮朝紹治帝期に下された避諱改音の実態を知る上で重要な記載であるが、明命 17（1836）年にその禁止が解かれたことを記している。そこで、上述の個々の漢字の所属中古音と現代ベトナム漢字音を示すと以下の通りとなる。

（表 1）『大南寔録』に見える避諱改音事例

避諱前			避諱後		
皞	匣豪上開一[8]	hạo /haw^{6}/	昊	匣豪上開一	hạo /haw^{6}/
皜	匣豪上開一	hạo /haw^{6}/			
鎬	匣豪上開一	hạo /haw^{6}/	皓	匣豪上開一	hạo /haw^{6}/
鄗	匣豪上開一	hạo /haw^{6}/			
杲	見豪上開一	cảo /kaw^{3}/			
繳	章藥入開三	chước /cɯək^{7}/	灼	章藥入開三	chước /cɯək^{7}/
稿	見豪上開一	cảo /kaw^{3}/	教	見肴去開二	giáo /dzaw^{5}/
縞	見豪上開一	cảo /kaw^{3}/	誥	見豪去開一	cáo /kaw^{5}/
担	端寒上開一	đảm /ɗaw^{3}/	亶	端寒上開一	đảm /ɗaw^{3}/

一方、阮朝期において、個々の漢字の字音・用法の規範を示した『欽定輯韻摘要』という『佩文韻府』の内容を短くまとめた字書が明命 20（1839）年に出版されるが[9]、個々の文字項目が出版当時に頒布されていた避諱文字に当たる場合、その用法を欄外に注記した

8「匣母（声母）、豪韻（韻母）、上声（声調）、開口（開合）、一等（等位）」を示す。以下同様。
9 本稿では、漢喃研究院所蔵本の複写を使用する。複写に際しては、Nguyễn Thị Oanh 先生のお手を煩わせた。ここに記して謝意を表する。

例が散見される。まず、同書の「凡例」に見る避諱に関する記述を見る。

一凡恭遇廟諱御名諸正字、謹奉改様、仍于格上標題爲識。其字音同者直書本字、但於格上標出、與御名同音等字、用示分別、至如臨讀避音、臨文隨義改用、無得直用本字。

（廟諱や御名に使われている文字にかたじけなくも出くわした場合は、必ず謹んでその形を変え、枠の上に標題としてはっきりわかるよう示す。字音が同じ文字の場合、本字を直接記すが、枠の上に示し、御名と同音の類の字は、読む際には音を避け、文中に記す際にはその意味によって同義の文字に改めることにより区別して示し、直接本字を用いることはできない。）

その例を以下に列挙し、同じく個々の字音について考察する[10]。

{ 日 * 爰 } 字原左從日右從爰、恭遇廟諱、謹奉改様、讀作緩字。	（第 5 巻 61 葉表）
{ 禾 * 重 } 字原左從禾右從重、恭遇廟諱、謹奉改様、讀作重字。	（第 7 巻 5 葉裏）
[空白]	（第 5 巻 3 葉表）
{ 日 * 交 } 字原左從日右從交、恭遇御名、謹奉改様、讀作暸字。	（第 6 巻 12 葉裏）
{ 月 * 詹 } 字原左從月右從詹、恭遇御名、謹奉改様、讀作澹字。	（第 6 巻 64 葉表）

{ 日 + 侖 } 字恭遇廟諱、謹依本字、但讀作巻字。	（第 8 巻 20 葉裏）
藁字與御名同音、謹依本字、但讀作皓字。	（第 6 巻 21 葉表）
皦字與御名同音、謹依本字、但讀作暸字。	（第 6 巻 12 葉裏）
擔字與御名同音、謹依本字、但讀作澹字。	（第 9 巻 40 葉裏）
瑞字恭遇尊名、謹依本字、但讀作琅字。	（第 3 巻 67 葉裏）

前半 4 例は、当該文字が諱の字であることから字形を変えると同時に、改音する場合は某字と同様の発音で読むよう指示する内容であり、後半 5 例は、やはり諱の字に当たるか或いは諱の字と同音であることから、字形は変える必要はないが、某字と同様の発音に改音するよう指示するものである。個々の字音について上の例と同様以下にまとめておく。

10 フォントの都合上、{A*B } は部首 A, B が上下に配列されること（例：{ 田 * 介 } ＝界）、{A+B} は左右に配列されること（例：{ 言 + 吾 }= 語）を示す。

（表２）『欽定輯韻摘要』に見える避諱改音事例

避諱前			避諱後		
暖	泥桓上合一	noãn /nwan^{4}/	緩	匣桓上合一	hoãn /hwan^{4}/
種	章鍾上合三	chủng /cuŋ^{3}/	重	澄鍾去合三	trọng /ʈɔŋ^{6}/
皎	見蕭上開四	kiểu /kiəw^{3}/	暸	來蕭平開四	liệu /liəw^{6}/
膽	端談上開一	đảm /ɗam^{3}/	澹	定談去開一	đạm /ɗam^{6}/
{日＋命}	見魂去合一	cốn /kon^{5}/	卷	見仙去合三	quyển /kwiən^{3}/
藁	見豪上開一	cảo /kaw^{3}/	皓	匣豪上開一	hạo /haw^{6}/
皦	見蕭上開四	kiểu /kiəw^{3}/	暸	來蕭平開四	liệu /liəw^{6}/
擔	端談去開一	đảm /ɗam^{3}/	澹	定談去開一	đạm /ɗam^{6}/
璫	端唐平開一	đang /ɗaŋ^{1}/	琅	來唐平開一	lang /laŋ^{1}/

以上、『大南寔録』と『欽定輯韻摘要』に記された避諱改音の例を列挙したが、これら諸例から抽出される避諱改音の特徴は、音節初頭子音、声調、音節末子音の交替がその手段として採られていたことである。特に後者の諸例から音節初頭子音の改変が主な手段として採用されている点が指摘できる。それを見る限り、例えば平山［1992］に指摘された中国で行われた避諱改音の事例と酷似する事実がわかる。中国においても、音節初頭子音あるいは声調を交替させる方法が一般的であった事実が指摘されている。しかし、実際に避諱により改変された字音が現代に伝承された諸例を分析すると、音節初頭子音や声調の交替によると思われる例はほとんど皆無に等しく、実際には韻母（特に主母音）の改変がほとんどであったことがわかる。

以下に、避諱改音の結果が現代に残存する例をいくつか示すが、それが特に南部の口語に残存することがしばしば指摘されている［Trần 1995］。そこで、主に南部の Ca dao「歌謡」と呼ばれる口承を基礎とする詩歌（Bảo, et al.［1984］）や南部作家による作品の中に見られる規範から外れる字音の例を示すと同時に、現代ベトナム漢字音の正規の読音として定着しているが漢語中古音との比較により例外的な字音と認定される例を示す。

まず、南部歌謡の例を以下に示すが、［　］内の頁数は、Bảo, et al.［1984］所収頁数を示す。

［p.142］ Muốn làm <u>kiểng</u> lấy gái Sài Gòn, （← cảnh）
Muốn ăn mắm cái lấy gái đen giòn Bạc Liêu.
（飾って眺めていたいならサイゴンの娘、
美味しい塩辛が食べたいならバック・リウの色黒美人。）

［p.155］ Ai ơi, lỡ hội chồng con,
về đây gá <u>ngõi</u> vuông tròn được không? （← nghĩa）
（そこの時期を逃したお嬢さん、
ここに来て僕と添い遂げませんか？）

［p.157］ Biểu cho em hay trước: anh đã có vợ rồi, （← bảo）
Đôi ta vung chẳng xứng đôi,
Em về kiếm chỗ lựa người trao thân.
（言っておくけど、僕にはもう妻がいる。
僕たちは似合いの二人でもないし、
帰って身を捧げる人を探した方がいいよ。）

［p.335］ Ngó vô tâm kiếng thấy hình, （← kính）
Hạc chầu đủ cặp, hai đứa mình lẻ đôi.
（不意に鏡をのぞいて映るのは、
つがいの鶴と、あなたのいない一人ぼっちの私）

［p.380］ Thấy cô nho nhỏ, tôi muốn bỏ nghề đờn,
theo cô làm tùng giả, đánh quờn cho cô coi. （← quyền）
（きゃしゃな君を見て、弾き手をやめたくなったよ。
君の従者になって、武芸の腕前を見せることにしよう。）

また、フランス植民地期の知識人 Trương Vĩnh Ký による 1881 年の著作 *Voyage au tonking en 1876*（*Chuyến đi Bắc kì năm Ất Hợi*）の中でハノイ中心部にある「還剣湖」を *Hồ Hoàn-gươm* と表記する一方で *Hồ Huờn-gươm* とも記しており、当時「還」の字音として huờn /hwən^{2}/ という非規範的な字音が存在した事実を窺わせる。

南部方言に一般に見られる huê /hwe^{1}/「華」, hướng /hɯəŋ^{2}/「洪」, phước /fɯək^{7}/「福」等の漢字音も避諱改音によるものと伝えられている。

以上の諸例と避諱の原因となった人物の諱に関する情報を以下に整理する[11]。

11 『大南寔録』等の記事に散見される通り、避諱の対象となった諸字は、避諱文字と同音の文字に加えて、近似の字音を有する諸字も含まれる。しかし、「近似」の包括する範囲を正確に規定することが現時点では難しいので、以下では避諱文字と同音の諸字のみを考察の対象とする。

（表３）南部方言に見る避諱改音事例

No.	対象	所属中古音による正規字音	避諱音	避諱の理由
1	景	見庚上開三：cảnh /kɛŋ^{3}/	kiểng /kiəŋ^{3}/	陳太宗（㬎）[1225-58] と同音
2	義	疑支去開三：*nghĩ /ŋi^{4}/, nghĩa /ŋiə^{4}/	ngỡi /ŋəj^{4}/, ngãi /ŋaj4/[12]	阮福溱（義王）[1687-91]
3	(寶)	幫豪上開一：bảo /ɓaw^{3}/	biểu /ɓiəw^{3}/	阮氏玉寶（鄭検 [1539-70] の妻）と同音
4	鏡	見庚去開三：kính /kiŋ^{5}/	kiếng /kiəŋ^{5}/	陳睿宗（暾）[1372-77] と同音
5	拳	群仙平合三：quyền /kwiən^{2}/	quờn /kwən^{2}/	宋氏特（權）（阮福淵[1691-1725] の妻）と同音
6	還	匣刪平合二：hoàn /hwan^{2}/	huờn /hwən^{2}/	阮氏環（阮福暎 [1802-19] の母）と同音
7	華	曉麻平合二：hoa /hwa^{1}/	huê /hwe^{1}/	胡氏華（紹治帝 [1841-47] の母）
8	洪	匣東平合一：hồng /hoŋ^{2}/	hường /hɯəŋ^{2}/	洪任（嗣徳帝 [1847-83] の幼名）
9	福	非屋入合三：phúc /fuk^{7}/	phước /fɯək^{7}/	西山朝期 [1788-1802] の避諱字

次いで、現在漢字音として一般に辞書に記載される常用の字音の中に避諱改音の残存と推定される諸例が散見される。それらを以下に挙げておく。

（表４）常用漢字音に残存する避諱改音事例

No.	対象	所属中古音による正規字音	避諱音	避諱の理由
1	寶	幫豪上開一：bảo /ɓaw^{3}/	bửu /ɓɯw^{3}/	表 3, No.3 参照
2	基	見之平開三：*ki /ki^{1}/	cơ /kə^{1}/	黎仁宗（邦基）[1442-59]
3	合	匣合入開一：*hạp /hap^{8}/	hợp /həp^{8}/	莫茂洽 [1562-92] と同音
4	利	來脂去開三：*lị /li^{6}/	lợi /ləj^{6}/	黎太祖（黎利）[1428-33]
5	任	日侵去開三：nhậm /ɲəm^{6}/	nhiệm / ɲiəm^{6}/	洪任（嗣徳帝 [1847-1883] の幼名）
6	進	精真去開三：tấn /tən^{5}/	tiến /tiən^{5}/	鄭氏玉瑾（黎熙宗 [1675-1705] の母）と同音
7	實	船質入開三：thật /tʰət^{8}/	thiệt /tʰiət^{8}/, thực / tʰɯk^{8}/	嘉隆帝 [1802-19] が胡氏華に与えた名
8	時	禪之平開三：thì / tʰi^{2}/	thời / tʰəj^{2}/	阮福璔（嗣徳帝）[1847 -83] と同音
9	全	從仙平合三：tuyền /twiən^{2}/	toàn /twan^{2}/	阮福㟧（紹治帝）[1841- 47] と同音

12　地名 Quảng Ngãi「広義」などに見える「義」の読音。

表４の諸例に関して、最古のまとまったローマ字資料である Alexandre de Rhodes の『安南語・ポルトガル語・ラテン語辞典』(1651, ローマ刊) の中に記載された字音を確認すると、辞書刊行後に避諱改音がなされたと推定される No.5~9 に関しては、それぞれ改音前の字音のみが記載されていることが確認される［清水 1999: 71-72］[13]。

以上の諸例を見て明らかなことは、ベトナムにおいて実際に採用された避諱改音の手法は、やはり韻母の改変が主流を占めており、且つその改変にも一定の音声的特徴が見てとれる。まず、(a) 本来の主母音を母音 -ơ /-ə/ に置換する、あるいは韻母に何らかの形で -ơ /-ə/ を挿入する方法が挙げられる。(例：表 3 No.2, 5, 6; 表 4 No.2, 3, 4, 8) そして、(b) 単母音と二重母音の置換も見られる。(例：表 3 No.1, 3, 4, 8, 9; 表 4 No.5, 6, 7, 9) その他、単純な母音の置換（例：表 3 No.7; 表 4 No.1）なども見られる。

以上に抽出した避諱改音の一般法則を参考に改めて本碑文に見る避諱文字「株」の字音 châu /cə̆w^{1}/ について考察する。既述の通り当該字音の韻母は例外的であり、以下に見るように多数決の原理で規範的字音を割り出すとすれば、*chu /cu^{1}/（あるいは *tru /ʈu^{1}/）なる音が期待されるところである。そこで、仮に上記（a）の方法でこの字音に避諱改音のプロセスを施したとすると、理論的には *chơu /cə̆w^{1}/ 等の音が生成される。ところが、現代ベトナム語の音素配列規則では主母音 /ə/（現実の音声は [ɤ]）と音節末音 /w/ との結合が許されないので、結果として聞こえの近い主母音 /ə̆/（現実の音声は [ʌ]）に置き換えられ [14]、現代の châu /cə̆w^{1}/ を持つに至った可能性が想定される。

５．虞韻例外字音

本碑文所収の避諱文字「株」の漢字音 châu が避諱により人為的に改変された字音である可能性を認めつつ、続いて当該字音が所属する韻母虞韻の対応関係について改めて考察したい。20 世紀のベトナム漢字音を対象にした三根谷［1972］並びに 17 世紀の漢字音を対象とした清水［1999］を参考に、虞韻所属の諸字から声母毎に代表的な字音を選び、以下にその対応形式を列挙する。

---

13 Ngô［1997］は「平」の字音 bằng /băŋ^{2}/ が規範的な字音 bình /ɓiŋ^{2}/（並庚平開三等）から避諱改音により生じたものとし、その理由を「阮光平（阮恵の別名）」を避けたものと考え、時期を西山朝（1788-1802）としているが、Rhodes の辞書にはすでに bằng /băŋ^{2}/ の形式が一般的に使われており（pp. 5, 25, 135, 262, 350, 362, 734)、避諱による字音としても、より早い時期に生じたと考えるべきである。

14 現代ハノイ方言を基礎に行った知覚実験によると、段階的に母音部を短縮した bớt /ɓət^{5}/ [ɓɤt˥] は、ほとんどの場合元来の音節 bớt /ɓət^{5}/ として知覚されたが、母音が短くなるにしたがいその比率が若干下がり bớt /ɓət^{5}/ と知覚されない全ての場合において例外なく bất /ɓə̆t^{5}/ [ɓʌt˥] と知覚された。したがって、ハノイ方言話者の知覚において、/ə/[ɤ] と /ə̆/[ʌ] は音声的近似性を有するものと考える［清水 2007］。

15 17 世紀字音の右に付した下付き数字は Rhodes の辞書中の出現頁数を示す。

（表５）虞韻所属諸字のベトナム漢字音 [15]

虞韻	平		上		去	
	20C	17C	20C	17C	20C	17C
非	phu 夫膚	phu 夫 603	phủ 府父腑脯 bô 脯	phủ 府 605	phú 賦傅 phó 付傅	phú 付 604
敷	phu 孚敷		phủ 撫剖 vũ 撫		phó 赴訃 thú 赴	
奉	phù 扶符夫 phu 枹 bồ 苻 bầu 瓿	phù 扶 604, 符 604	phụ 父輔 phủ 釜腐 phũ 釜	phụ 父 606, 輔 607	phụ 附 phó 鮒 phò 駙	phù 駙 442
微	vu 誣巫蕪憔 vô 無毋	bu 誣 584 vô 無 870	vũ 武舞廡鵡 võ 武	vũ 武 875	vụ 務鶩霧 vu 鶩	
知	tru 誅蛛袾 chu 誅株 châu 株		chủ 拄		trú 住駐 chú 註	
徹	su 貙					
澄	trù 廚躕裯 chù 廚躕 chú 裯		trụ 柱 chụ 柱	trụ 柱 835	trụ 住	
来	lâu 鏤		lữ 僂縷褸 lữu 蔞		lũ 屢	
見	cu 俱 câu 俱拘痀駒	câu 拘 91	củ 矩榘蒟 cử 踽		cú 句 cụ 瞿 cù 屨 cự 屨 lủ 屨	
溪	khu 區軀驅嶇 xu 軀					
群	cù 衢氍劬絇 cồ 瞿權 cộ 鸜 câu [illegible]		cũ 窶 vũ 踽		cụ 具懼	
疑	ngu 愚虞娛隅嵎 ngung 禹隅嵎	ngu 愚 536 ngộ 愚 536	ngũ 俁窶		ngụ 寓禺 ngộ 遇	
精	tu 諏 su 陬				tụ 足	
清	xu 趨		thủ 取 thú 取		thú 娶趣	
從			tụ 聚	tụ 聚 839	tụ 聚	
心	tu 須鬚 nhu 需					
初	sô 芻					
崇	sô 雛鶵					
生			sổ 數藪		số 數	số 數 689
章	chu 朱硃 châu 朱珠硃袾 thù 侏		chủ 主宰炷塵 chúa 主		chú 注註澍鑄 chù 註	
昌	xu 樞姝 khu 樞					
書	thâu 輸 du 輸	du 輸 761			thú 戍輸	
常	thù 殊洙銖		thụ 豎豎		thụ 樹澍 thọ 樹	
日	nhu 儒濡襦繻臑 nho 儒	nhu 儒 556 (nho 儒 553)	nhũ 乳擩	nhũ 乳 556 nhủ 乳 556	nhụ 孺	
影	vu 紆		ủ 傴 khú 傴 ử 噢		ứ 鴎 ấu 嫗 âu 嫗	
云	vu 于盂芋迂		vũ 羽宇雨禹		vũ 芋	
以	du 兪揄逾臾愉 ru 兪揄逾		dũ 庾愈窳 rũ 庾愈窳		dụ 喻諭裕 giụ 喻 dũ 喻裕	dụ 喻 68
曉	hu 吁訏盱欨 vu 訏 vù 吁		hũ 栩詡 hú 欨		hú 妐呴煦 húng 酗 hung 酗	

以上より、虞韻の一般的対応形式は -u/u/ を基礎とし、荘系声母及び一部の非・見系声母諸字に対しては、-ô/o/ が対応することが改めて確認された。これら声母はそれぞれそり舌音（retroflex）、唇摩擦音（labial fricative）、軟口蓋音（velar）の範疇に相当するが、いずれも唇音性、後舌性の面で母音 /u/ の持つ素性と重なることから、一部の音節において起こったある種の異化の結果として母音 /o/ を取るに至ったものと考えられる。ここでは、例外的字音を有する個々の字に対して、考察を加える。

まず、他の韻母所属字、或いは虞韻所属の他の声母字からの類推によると考えられる諸例を声母毎に整理する。

並母	bầu /ɓəw^{2}/	瓿	(← phẩu /fəw^{3}/	瓿：侯韻)
知母	châu /cəw^{1}/	株	(← châu /cəw^{1}/	朱：虞韻)
來母	lâu /ləw^{1}/	鏤	(← lâu /ləw^{1}/	婁：侯韻)
書母	thâu /t^{h}əw^{1}/	輸	(← thâu / t^{h}əw^{1}/	偸：侯韻)
見母	câu /kəw^{1}/	俱拘疴駒	(← câu /kəw^{1}/	句：侯韻)
群母	câu /kəw^{1}/	鼩	(← câu /kəw^{1}/	句：侯韻)
影母	ẩu /əw^{3}/	嫗	(← ẩu /əw^{3}/	嘔：侯韻)
	âu /əw^{1}/	嫗	(← âu /əw^{1}/	區：侯韻)

次いで、本稿の考察により避諱改音により生じた例外的字音として以下の諸字を示しておく。「株」そのものの字音は、上述の通り下記の字音からの類推によるものと考えられる。

章母	châu /cəw^{1}/	朱珠硃祩

残る例外字音のうち、母音を -o/ɔ/ にする諸例について見る。まずは上と同様、声母毎に 20 世紀、17 世紀字音を併記して示す。

	20 世紀		17 世紀	
非母	phó /fɔ^{5}/	付傅	phú /fu^{5}/	付
敷母	phó /fɔ^{5}/	赴訃		
奉母	phò /fɔ^{2}/	駙	phù /fu^{2}/	駙
微母	võ /vɔ^{4}/, vũ /vu^{4}/	武	vũ /vu^{4}/	武
常母	thọ /tɔ^{6}/, thụ /t^{h}u^{6}/	樹		
日母	nho /ɲɔ^{1}/, nhu /ɲu^{1}/	儒	nhu /ɲu^{1}/（nho /ɲɔ^{1}/）	儒

三根谷［1972: 133］は -o/ɔ/ の諸例を「古い音の残存と認められ」るとしているが、上記 17 世紀の規則的な対応形式を見ると必ずしもそうとは言えないことになる。現時点では例外字音の明確な理由はわからないが、一部は 17 世紀以降に例外的字音を獲得するに至

った可能性をここで指摘しておきたい。

6．結論

以上の考察を通じて得られた結論として、以下の 4 点を指摘する。

（1）護城山碑文欠落部の発見により、冒頭 12 行の内容がほぼ明らかとなった。

（2）所収避諱文字「丙（南）」、「月（月）」、「株（株）」から、年号記載箇所を削り取られた状態でも当該碑文が陳朝期 1298 年から 1395 年の間に建立されたことが確定できる。

（3）『大南寔録』、『欽定輯韻摘要』等の史書に見える避諱改音の指示の例は、その多くが中国の方法と同様、音節初頭子音や声調の改変によるものである。しかし、現在南部方言や南部作家の文章に残る実際の避諱改音の残存形式や常用漢字音に残存する避諱字音を拾い集め分析した結果、ベトナムにおける避諱改音は特に主母音の改変が主な手段であることがわかった。

（4）従来、例外性の理由が不明であった避諱字「株」の字音 /cɔ̆w [1]/ も避諱改音により例外的字音を有するに至ったと解釈でき、虞韻に対する一般的対応形式（-u /u/, 荘系及び一部の非・見系声母では -ô/o/）の妥当性を強化することができた。

今後、虞韻以外の韻母に関しても例外的字音に関する分析を進め、ベトナム漢字音研究におけるベトナム語内部からのアプローチを進めてゆきたいと思う。

参考文献

清水政明 , 1999,「Alexiandre de Rhodes の辞書に見るベトナム漢字音について」,『東南アジア ― 歴史と文化 ―』28, 東南アジア史学会 , pp.55-80.

―――, 2007,「学習者特性 ― ベトナム人日本語学習者における母音長に関わる誤用分析」,『日・越異文化理解のための双方向語学教材の開発に関する研究 ― 日・越間遠隔講義実施のための予備的調査』（研究成果報告書）, 平成 18 年度「新しいアジアとの交流事業」に関する共同研究（研究代表者：清水政明）, 首都大学東京オープンユニバーシティ , 東京 , pp.26-39.

清水政明 , Lê Thị Liên, 桃木至朗 , 1998,「護城山碑文に見る字喃について」,『東南アジア研究』36-2, 京都大学東南アジア研究センター , 京都 , pp.149-177.

平山久雄 , 1992,「中国語における避諱改詞と避諱改音」,『未名』10, 中文研究会 , 神戸 , pp. 1-22.

三根谷徹 , 1972,『越南漢字音の研究』, 東洋文庫論叢第五十三 , 東洋文庫 , 東京

陳垣 , 1962,『史諱挙例』, 中華書局 , 北京

Bảo, Định Giang, et al., 1984, *Ca dao - dân ca Nam bộ*, Nhà Xuất bản Thành phố Hồ Chí Minh, Thành phố Hồ Chí Minh.

Honey, P. J. (translated and edited), 1982, *Voyage to Tonking in the year Ất-Hợi (1876)*, by Trương Vĩnh Ký, Reader in Vietnamese Studies in the University of London, School of Oriental and African Studies, University of London.

Lê, Thị Liên, 1989, *Những tấm bia đá thời Trần ở núi Non Nước (thị xã Ninh Bình – Hà Nam Ninh)*, Luận văn tốt nghiệp chuyên ngành Khảo cổ học, Trường Đại học Tổng hợp Hà Nội, Khoa Lịch sử.

Maspéro, H., 1912, “Etudes sur la phonétique historique de la langue annamite”, *BEFEO*. 12-1, pp.1-127.

Nguyễn, Huệ Chi (ed.), 1988, *Thơ Văn Lý-Trần*, tập II, quyển thượng, Nhà Xuất bản Khoa học Xã hội, Hà Nội.

Ngô, Đức Thọ, 1997, Nghiên cứu chữ huý Việt Nam qua các triều đại, Nhà Xuất bản Văn hoá, Hà Nội.

Phan, Văn Các, et al. (eds.), 2002,『越南漢喃銘文匯編』第二集陳朝下，河内漢喃研究院・嘉義中正大学文学院

Shimizu, M., Lê, Thị Liên, and Momoki, S., 2006, “A Trace of Disyllabisity of Vietnamese in the 14th Century - Chữ Nôm Characters Contained in the Inscription of Hộ Thành Mountain (II)-”,『アジア言語論叢 6 外国学研究』64, 神戸市外国語大学外国学研究所，神戸 , pp.17-49.

Shimizu, M., Momoki, S., and Lê, Thị Liên, 2007, “Discovery of the Lost Portion of Hộ Thành Sơn Inscription (1342) and the Irrregular Readings of Taboo Characters in Sino-Vietnamese Phonology”, Paper presented at the 40th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics, Harbin, Sept. 26-29, 2007.

Trần, Thị Ngọc Lang, 1995, *Phương ngữ Nam bộ*, Nhà Xuất bản Khoa học Xã hội, Hà Nội.

（2009.10.15　受理）